

ソレガドーシタ症候群

佐藤明達

“What does it matter to me?” Syndrome

Satô Akisato

abstract

This syndrome prevails over Japanese society. People look the politician as an actor, and indifferent to his policy. It is called “Audiential Democracy”. In astronomical community, rigorous use of astronomical terms is refused occasionally. For example, “Nihon Zikan” (exactly speaking, Tyûô Hyôzyun Zi, i. e. Central Standard Time) is used universally in mass-media. Confusion between time-interval and time-instant is traditional in our community. Can sciences stand on these ambiguous ground? It is far from “Don’t mind”.

1.はじめに

私達はみな途方もない情報過多の世界に漂い、情報に接するだけで精一杯で、一つ一つを十分に検討する余裕がない。その結果、いいかげん、うやむや、成り行き任せ、無関心など、思考減退ないし思考停止状態に陥ってしまった。日本はまさにアバウトサウルの天国となった。その例をいくつか挙げてみよう。

2.日本社会では

- (A) 国債・地方債の合計残高が800兆円を越えた ソレガドーシタ
- (B) 中国・韓国は首相の靖国神社参拝を非難している ソレガドーシタ
- (C) 韓国は竹島を実効支配している ソレガドーシタ
- (D) 沖縄に在日米軍基地の75%が集中している ソレガドーシタ
- (E) 二酸化炭素の増加で地球温暖化が加速している ソレガドーシタ
- (F) 教育基本法を改正して愛国心を盛り込むことになった ソレガドーシタ
- (G) 学校教員は10年毎に免許証を更新することになる ソレガドーシタ
- (H) 学校では国旗掲揚・国家斉唱が強制される ソレガドーシタ
- (I) 学校の職員会議で挙手による採決が禁止される ソレガドーシタ
- (J) 学校でキレる生徒が多くなった ソレガドーシタ
- (K) マスコミでは大阪も小坂もOsaka、京都も巨頭もKyoto、天教も転居もTenkyoと書く ソレガドーシタ

3.本研究会では

- (L) 会名に「普及」の文字があるが、「普及」の文字のない学会は普及活動をしていないのか? ソレガドーシタ
- (M) 年会に限って、なぜ「天文教育研究会」というのか? ソレガドーシタ
- (N) 日本天文学会では年会にメインテーマを掲げないのに、本会の年会ではなぜいつもメインテーマを設定するのか? ソレガドーシタ
- (O) 本会の学生会員に、日本天文学会の学生会員のような明確な根拠はあるのか? ¹⁾ ソレガドーシタ
- (P) 名簿に分野別・支部別の名簿を載せるのは、紙と労力と送料の無駄だ²⁾ ソレガドーシタ

- (Q)会報は隔月発行なのに、3月号、5月号などと呼ぶのはいかなものか(2月号、4月号は出たことがない) ソレガドーシタ
- (R)会誌「天文教育」への投稿規定には、投稿者の著作権に対する配慮がない³⁾ ソレガドーシタ
- (S)発足して20年経ち、会員数も600名を越えたのに、未だに手弁当で会誌を編集している(ボランティア任せ) ソレガドーシタ
- (T)天文教育は面白くなくてはいけないのか?⁴⁾ ソレガドーシタ

4.天文分野では

- (U)干潟星雲(Lagoon Nebula)は誤訳。潟湖星雲というべきだ⁵⁾ ソレガドーシタ
- (V)8の字星雲(Eight-burst Planetary,NGC3132)も誤訳。八噴星雲というべきだ
ソレガドーシタ
- (W)マゼラン雲(Magellanic Cloud)は雲であって、マゼラン星雲(Magellanic Nebula)ではない ソレガドーシタ
- (X)「秤動(libration)」は「ショウドウ」と読むべきだ⁶⁾(「ヒョウ」「ピン」は、「平」を音符と解したところからの誤読)⁷⁾ ソレガドーシタ
- (Y)恒星のフラムスチード番号は、フラムスチード自身が付けたものではない⁸⁾
ソレガドーシタ
- (Z)フラムスチード星図の乙女座は、翼が胸に着いている⁹⁾ ソレガドーシタ
- (a)図書館では天文書とUFO書とが同居している¹⁰⁾ ソレガドーシタ
- (b)フーコー振子の振動面は宇宙空間に対し不変ではない¹¹⁾ ソレガドーシタ
- (c)重さは質量と同じではない¹²⁾ ソレガドーシタ
- (d)「日本時間」は「日本時」というべきだ¹³⁾ ソレガドーシタ

5.逆説的日本時間論・ローマ字論

現在マスメディアでは、日本で使っている時刻を、すべて「日本時間」と呼んでいる。法的な名称である「中央標準時」は、国語辞典・百科事典や「知恵蔵」「イミダス」などにしか見いだすことはできない。日本ではまず百パーセント、「日本時間」で通用する。従って、法的にも中央標準時を止めて「日本時間」を正式に採用すべきである。「日本時間」で何ら不都合が生じていないからである。現状のままだと、期末テストなどで「日本時間」と書いてベケにされた生徒が、「日本時」など誰も使っていないと抗議したとき、教師はどう説明したらいいのか。

同じことはローマ字についても言える。1954年内閣告示第一号で制定されたローマ字は訓令式(新表)で、「国際的関係その他従来慣例をにわかに改めがたい事情のある場合に限り、第2表(ヘボン式と日本式)に掲げたつづり字によってもさしつかえない」と但し書きがあるが、日本中の地名・駅名それに人名のローマ字表記はほとんどヘボン式である。従ってヘボン式ローマ字を正式とし、訓令式は特別な例外とすべきである。さもないと、学校で習ったローマ字が駅名・人名のローマ字と違うのを見て生徒が戸惑うだろうから(但し筆者はパソコンで訓令式を使っている)。

話があらぬ方向に逸れた。元に戻そう。

6.日本人のいいかげんさ

人々はみな日々の生活に追われ、物事を深く考えようとしなない。将来に希望が持たないので目先の快楽ばかり追っている。自分一人の殻に閉じ籠り、「あっしにはかわりのないこってござんす」と木枯し紋次郎をきめこんでいる。日本列島に無気力・無感動・無関心の「三無主義」が徘徊している。古来日本人は「和をもって貴しとなす」で来たから、事を荒立てず、なるべく穏便に済まそうとする。見ざる、言わざる、聞かざるの「三猿主義」でいこうというわけだ。触らぬ神に祟りなし、である。夏目

漱石も言う、「筋を通せば窮屈だ」と。政治は政治屋に白紙委任して、民衆は劇場の観客に甘んじている。Silent Majorityに対して政治が劇場型、パフォーマンス優先になるのは当然だ¹⁴⁾。

日常、いいかげん、うやむやなど、なまぬるい例をいくらでも眼にすることができる。それを「おおらか」とか「情に厚い」とかの美辞麗句で美化している。これは日本人の国民性であろう。この風土の上に厳密で論理的、実証的な科学を浸透させるのにはよほどの覚悟が必要である。

7.おわりに

論理的、合理的に考える人がふえれば、社会はおのずから筋の通った見通しのいい世界に変わって行くだろう。私達はまず、思考停止状態から抜け出すことから始めなければならない。なぜだろう、おかしいな、と思われることは、自然界にも人間界にも充満しているのだから。そして、おかしいことはおかしいと、勇気をもって声を挙げねばならない。

[参考文献]

- 1) 佐藤明達、1994、学生会費について 天文教育普及研究会回報 No.16, p.11
- 2) 「天文教育」編集部、2003、アンケート結果報告 「天文教育」Vol.15, No.5, p.12
- 3) 編集委員会、2003、『天文教育』執筆・編集の手引き 「天文教育」Vol.15, No.1, pp.2~5
- 4) 佐藤明達、2003、面白くないことは教えなくていいか 「天文教育」Vol.15, No.3, p.68
- 5) 佐藤明達、1999、干潟星雲——名は体を表わすか? 「天文教育」Vol.11, No.3, p.36
- 6) 佐藤明達、2002、「秤動」の読み方 「天界」No.926, p.425(July 2002)
- 7) 山口明穂・竹田 晃編「岩波 新漢語辞典」1994 p.921
- 8) 高橋健一、1993、フラムスチード星図のことなど 「天界」No.822, p.360(Nov.1993)
- 9) 佐藤明達、1994、乙女は空を飛べるか? 「第8回天文教育研究会年会集録」p.79
- 10) 佐藤明達、2005、天文書とUFO書の同居 「天文教育」Vol.17, No.1, p.47
- 11) 佐藤明達、1991、地球は自転しているか? 「第5回天文教育研究会年会集録」p.106
- 12) 佐藤明達、2006、重さは質量と同義か 「天文教育」Vol.18, No.4, p.26
- 13) 佐藤明達、2004、「日本時間」、誤用だ! 「第18回天文教育研究会年会集録」p.93
- 14) 野田正彰、閉ざされた不安から開かれた対話へ——日本社会の「気分」をめぐって—— 「世界」2006年2月号 pp.86~93

黙 認

今の日本は、「沈黙の同意」が蔓延している。生じているさまざまな問題に対し、「賛成ではないが声をあげない」ことによって「同意」した、という仮初の事実が積み上げられているからだ。(池内 了) (「世界」2003年5月号p.245)